「居場所」を利用した学習支援と伴走型教育生活相談による「ともに生きる」プロジェクト

子供の未来応援基金
2020年度未来応援ネットワーク事業
事業報告書

子供の未来応援国民運動

NPO法人在日外国人教育生活相談センター・信愛塾

子ども達は「ただいまー」と言って信愛塾に入ってくる

プロジェクトの目的

少子高齢化と人口減少が進む一方、在日外国人の人口は全国で288万人（2020年6月末現在）を超えた。

外国籍や外国にルーツを持つ子どもの中には言葉の壁や文化の違いに加え、

貧困などから学び続けることが困難な状態にある子どもも多い。

当プロジェクトでは家でも学校でもない第三の「居場所」を提供し、

子ども達が勉強や学校生活に向き合えるよう、日本語指導や学習支援を行う。

母語でコミュニケーションをとることもでき、

加えて同じ経験をしてきた先輩の存在は子ども達のロールモデルとなる。

また相談事業は保護者が抱えている教育・生活・人権にかかわる問題や在留資格、

制度の不理解などから起こる課題を解決することでエンパワーメントを促し、

内包する活力を発揮できるようサポートする。

家庭の安定は子ども達の安定に繋がり、貧困や教育格差などの負の連鎖を断ち切る契機となっていく。

「居場所」を利用した学習支援と
伴走型教育生活相談による「ともに生きる」プロジェクト

「居場所」を利用した学習支援事業

- 母語による学習支援、日本語学習
- 食事支援
- 「知る・学ぶ」イベントと研修

伴走型生活相談事業

- 多言語対応による教育、生活、人権の相談
- 家庭訪問と電話、SNSによる安否確認
- 関係者との情報共有・交換
- 食料品、日用品、衣料品の提供

信愛塾という「居場所」

日本語がうまくしゃべれるわけではなく、勉強も好きになれず、気持ちも揺れ、

言葉も揺れている子ども達。でも信愛塾に来るとみんなはじけてしまう。

中国語、韓国語、タガログ語、英語、日本語とさまざまな言葉が飛び交い、

子どもだけでなくさまざまな思いを抱えた大人達も訪れ、ありのままの自分でいられる空間。

子どもも大人も信愛塾という「居場所」を共有している。

1：1年生の時から信愛塾に通う男の子。6年生となり卒業を控え勉強に集中 ／ 2：勉強が終わると信愛塾の隣の公園で運動する。緊急事態宣言中は外遊びもできなかった ／ 3：絵を描くことが好きな子が信愛塾には多い

「居場所」を利用した学習支援事業

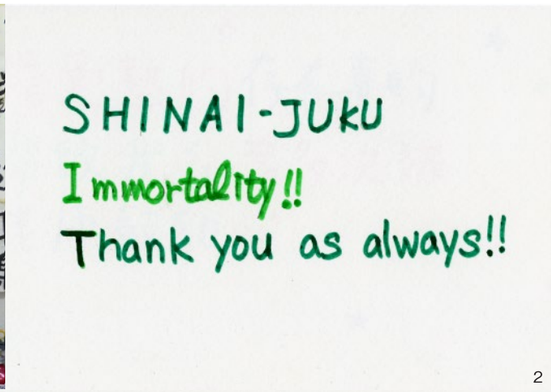
日本に暮らす外国籍及び外国につながる子ども達を対象にした「居場所」を利用した学習支援事業。
学校や地域社会で緊張を強いられる外国籍や外国につながる子ども達にとって、
安全で安心に過ごせる信愛塾は、家でも学校でもない第三の「居場所」となる。
信愛塾では母語による学習支援や日本語指導を無償で受けることができ、
学習が終わった後はスポーツ・音楽・美術などを楽しむことができる。
言葉の壁にぶつかり、学校や日常生活でストレスを抱える子どもにとって心を解き放つ場となる。
「居場所」を設けた活動を続けてきたことで、
かつて放課後を信愛塾で過ごした高校生や大学生、社会人は子どもたちのロールモデルとなり、
小中学生たちが先輩たちの背中を見て育っていける環境となっている。
現在もかつて支援を受けていた大学生や社会人がボランティアスタッフとして学習支援に参加している。
また、貧困などで安定して食事を取れない子ども達を対象に、
横浜中華街のキッズレストランや料理研究家と連携して食事を提供している。
信愛塾に来る子どもの国籍は中国とフィリピンが多数を占めている。

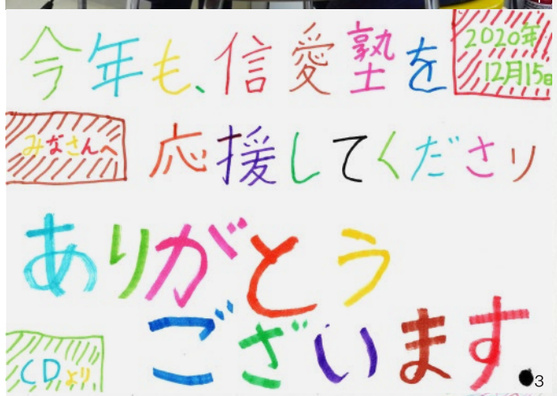
〈主な活動内容〉

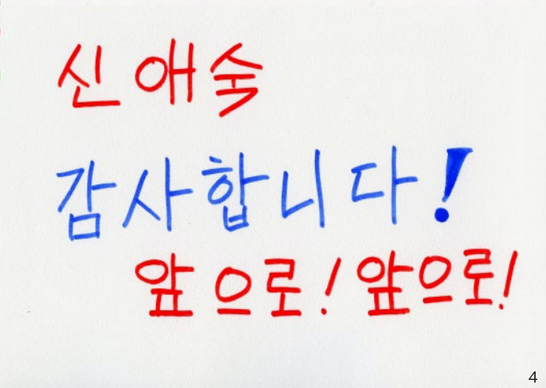
・母語を使用した学習支援（国語と算数の宿題、音読、教科学習）
・日本語指導（テキストを使用した日本語学習、会話練習）
・スポーツ（ドッジボール、鬼ごっこ、バスケットボール、キャッチボールなど）
・美術活動（七夕飾りの制作、会報誌に掲載するイラスト制作、ハッピーホリデーの装飾など）
・食事支援（キッズレストラン笑福、料理研究家による食事支援［→P6］、信愛塾独自での支援）
・イベント（料理教室［→P7］、食育教室［→P8］、写真教室［→P10］）

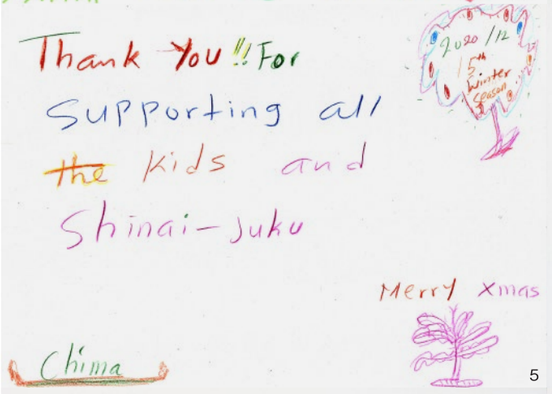
〈活動実績〉（2020年4月～2021年3月末）

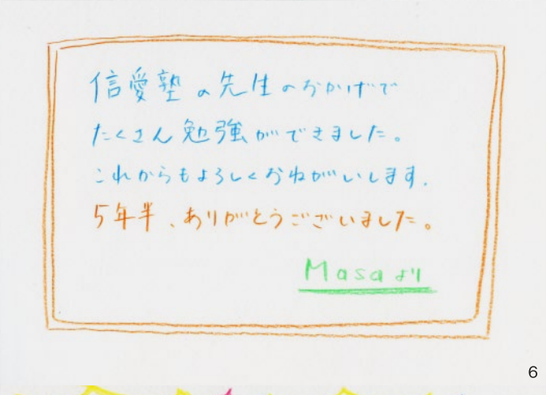
・スタッフ：3名／ボランティア：11名
・通訳：中国語2名、英語4名、タガログ語1名、韓国語1名
・活動回数：132回
・参加した子どもの人数：延べ702人
・参加した子どもの国籍：中国、フィリピン、ナイジェリア、ネパール、バングラデシュ、韓国、日本

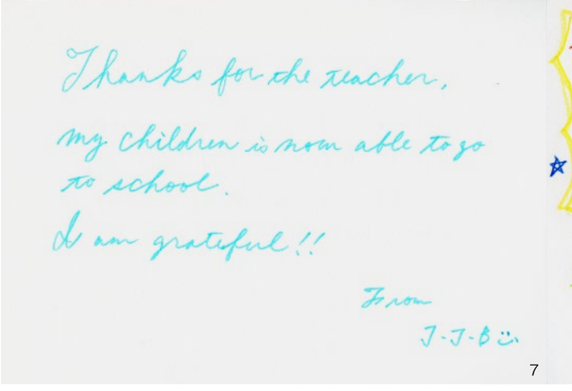


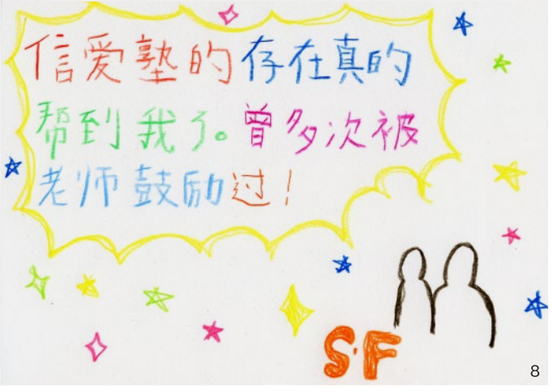












1：子どもの進学について相談する保護者 ／ 2〜8 利用者からのメッセージ　2：信愛塾よ不死鳥のように。いつもありがとう!　4：信愛塾ありがとう! 前へ前へ!
5：いつも子ども達を支えてくれてありがとうございます。　7：先生のおかげで子どもが学校に通えるようになりました。感謝しています!
8：信愛塾の存在に本当に助けられました。先生に何度も勇気づけられました!

伴走型教育生活相談事業

信愛塾では日本に暮らす外国籍及び外国につながる子どもの保護者を主な対象に、教育・生活・人権などにかかわる相談を常設・多言語対応・無償で行い、具体的な解決を目指す伴走型の相談・支援活動を続けている。

対応可能言語は英語、中国語、韓国語、タガログ語、ベンガル語。

相談件数は年間1,000件を超え、その場で解決できる事案もあるがDVやネグレクト、貧困、そして在留資格などが複雑に絡み合った相談など、10年以上支援を続けているものもある。

コロナ禍の中でLINEや電話による相談も増加した。

相談者は学習支援と同様に中国人、フィリピン人が多数を占めている。

解決には専門知識や経験、ネットワークが必要とされ、学校の教員、児童相談所、行政の関係セクション、生活保護のケースワーカーとのカンファレンスで解決の糸口を探り、事案によっては弁護士、行政書士、民生委員などとも連携して解決に努める。

家族2代（親世代・子世代）の相談を受けていることも長く活動を続けてきた信愛塾の特徴である。

〈主な活動内容〉

・生活、教育、人権などにかかわる相談を受ける。具体的にはDV、虐待、生活困窮、就労及び労働問題、進学、いじめなど。これらのほとんどの相談に在留資格の問題がかかわる

・家庭訪問と電話、SNSによる安否確認

・行政の関係セクション、学校、児童相談所、弁護士、行政書士、民生委員、社会福祉・医療・教育機関のソーシャルワーカーなどの関係者との情報共有・交換

・役所や病院、入管、不動産会社、職場などへの同行

・困窮する家庭に食料品（米・小麦粉・缶詰・インスタント食品など）と日用品（手指消毒用品、マスク、生理用品、シャンプー、タオル、文房具など）、衣料品を提供

〈活動実績〉（2020年4月〜2021年3月末）

・スタッフ：相談員 1名／相談補助 4名

・通訳：5名

・相談件数：1,011件

・対応言語：英語、タガログ語、中国語、韓国語、ベンガル語

・年齢層：10代後半〜70代（相談の80%が女性からの相談）

・相談者の国籍：中国、フィリピン、ナイジェリア、ネパール、バングラデシュ、韓国、タイ、カンボジア、日本

食事支援

信愛塾では生活の困窮などで安定して食事を取れない子ども達を中心に、
中華街にある「キッズレストラン笑福」の協力のもと、
レストランで作った料理を信愛塾のスタッフがピックアップして
子ども達に提供するというかたちで食事支援を行っている。
加えて料理研究家の長島由佳さんに栄養やアレルギー・宗教に配慮したお弁当、
バナナ、オレンジなどの果物を毎週のように提供していただいている。
インスタント食品を一人で食べる子や、家族と一緒でも理不尽なしつけで食事の時間が楽しくないという子もいる。
そのうような中、プロが作った温かい料理を友だちやスタッフと囲み、
みんなで会話を楽しみながら食べる時間はかけがえのない時間となる。
生活が苦しい家庭には米や小麦粉、缶詰やインスタント食品を渡すなどの支援も行っている。

1：休校期間中はみんなで食べる時間がとても貴重なものであった　2：キッズレストランが提供してくれたご飯を頬張る小学生
3：とても楽しそうに、美味しそうに食事をする姉妹　4：お弁当と一緒に届けてくれる果物を高校生も一緒に仕分けした

料理教室

“知る・学ぶ”イベントと研修 ①

子ども達が少し工夫することで自力で美味しくご飯を食べられるようになるために
信愛塾では毎年夏休みに料理教室を開いている。
例年であればサンドイッチ作りを、パンのスライス、ゆで卵の皮むきから具材を選んで挟むことまで
スタッフがアドバイスをしながら子ども達の手で行っている。
しかし今年はコロナ下での開催だったため、テーブルに並んだ具材から子どもが好きなものを選び、
スタッフがパンに乗せる形式にし、2部制にして子どもが分散して参加するように開催した。
そのような形式での開催ではあったが作り方を分かりやすく見せたことで
「帰ったら自分でも作ってみる」という言葉を口にする子どももいた。
また、子ども達は夏休み期間中はどこへも出かけられず、
友達にも会いづらい状況であったため、イベントに参加して友達と一緒に食事をしたことで
子ども達の気持ちが和む時間になったことにも料理教室を開催した意義が感じられた。

1：子どもが選んだ具材をパンに乗せていく ／ 2：食事の手を休めた一瞬の表情。子ども達は夏休み中にぐっと成長していく
3：リーダーが「いただきます」を言って食事を始める ／ 4：初めて参加した子どもも大満足した様子だった

食育教室

“知る・学ぶ”イベントと研修 ②

食事支援や果物を提供してくださっている料理研究家の長島由佳さんを講師に迎え、
信愛塾では初めてとなる食育教室を開催した。
飽食の時代で食品ロスが社会問題になっている一方、
信愛塾に関わる家庭には十分にご飯を食べられない家庭も少なくない。
だからこそ食べることの大切さや意味を子ども達に知ってもらうため、
日本語が不得意な子どもにも分かるやさしい言葉を使用し、
説明をただ聞くだけでなく主体的に参加するようにクイズも取り入れて、
食事の大切さをとても丁寧に説明していただいた。
クイズや質問には多くの子どもが手を挙げて積極的に発言し、
食べることが身体をつくるだけでなく、心を耕すことも楽しみながら学んでいた。

1：パワーポイントも使用して分かりやすく説明してもらった ／ 2：自分の考えを発表した子どもに拍手が送られた
3：6年生につられて多くの子どもが積極的に発言した ／ 4：「お米・パンなどが果たす役割」を考えて記入中

日本語・中国語・英語で制作したチラシ

国際教室※ 担当教員による研修

“知る・学ぶ”イベントと研修 ③

信愛塾に来ている子ども達が多く通う、横浜市立石川小学校 国際教室担当の酒匂亮一先生に
国際教室での日頃の取り組みを話していただき、加えて子ども達についての情報交換を行った。
この小学校に在籍する児童で信愛塾に通っている子どものうち、
6割を超える子どもが国際教室に通級している。研修の主な内容は以下の通り。

◎日本語指導及び教科指導について

・子ども達が見通しをもって取り組めるように、時間の学習予定をホワイトボードに書き記す。必要なら時間配分も記す。
→ 安心して学習に取り組め、加えて一つひとつの学習において集中しやすい。
・国際教室では基本的に日本語で話す。→ 児童に日本語を使う「必要感」をもたせるため。

◎環境づくりについて

・国際教室の雰囲気づくり → 基本的にいつでも利用できる。（担当がいれば）友達を連れてきてもいい。授業時間以外は母語を使ってよい。国際教室に属している子ども達の居場所になれるように心がけている。

◎児童理解

・保護者との連絡は家庭訪問 → 家庭訪問で保護者にコンタクトをとる。その方がこちらの意図が伝わりやすいように感じる。
・人と人との密は避けても情報は密に → 学校での情報、家庭での情報、信愛塾での情報を管理職・児童指導専任・担任・養護教諭で共有。さまざまな情報から一人ひとりの児童への関わり方が見えてくることも。

◎多様性の尊重や多文化共生

・区役所、国際交流ラウンジ、小学校によって企画。日本以外の文化を知ったり、慣れ親しんだりする。

◎2020年度からの取り組み

・英語、中国語、やさしい日本語でのメール配信 → 児童の家庭への一斉メールとは別に中国語と英語、やさしい日本語でメールを送信。コロナ禍でメールする機会が多くかなり大変であった。
・日本語未習得児童への評価 → 転入してきた児童が日本語ゼロだった場合、1年間は成績表に評価をつけないようにすることを提案。日本語ゼロで転入してきた子ども達が、読めない日本語のテストを受けて評価されることに対して自尊心が傷つくことも。1年間という期限付きで保護者確認のもと、成績表で評価をしない流れとなっている。
・「ポケトーク」の使用 → 翻訳機である「ポケトーク」を購入。授業では使わないが児童に伝えねばならない重要な連絡、保護者との会話、連絡などを円滑に進めることができるようになった。

◎課題

国際教室を担当して数年経つが、国際教室で受け持つ児童の中には言語のサポートよりも学習的な支援を必要とする児童が増えてきたように感じる。つまり日本語指導と特別支援を併せ持った指導をしなければならないところにきていると思う。国際教室でもユニバーサルデザインを意識して教室環境を整えたり、指導したりしなければならない。

※国際教室…日本語指導が必要な児童生徒に応じて、指導を担当する教員を配置。国際教室を設置し、日本語指導、教科指導、生活適応指導等を行う。

写真教室

“知る・学ぶ”イベントと研修　イベント④

東京を中心に広告や雑誌などの撮影で活躍している
写真家の水島大介さんを講師に招いて写真教室を開催した。
インスタントカメラやフィルムカメラをあえて使用し、
デジタル機器が当たり前である子ども達に初めての経験をしてもらった。
デジタルカメラやスマートフォン・タブレットと違い撮影枚数が限られること、
ファインダーを覗かないといけないこと、
撮ったものをすぐに確認できないことを伝えると
子ども達は真剣な表情で被写体を探し、1カットずつ丁寧に撮影をしていた。
子ども達が写真家という普段接することがない職業の人に接することで
将来の選択肢が広がることにつながる機会も作ることができた。

1：撮り方を教える前に撮られた1枚（水島賞 受賞）／ 2：公園の中で一生懸命被写体を探していた
3：みんなの力を借りてポーズを作った（信愛塾賞 受賞）／ 4：面白い影の形を探しているうちに参加者が寄ってきて

写真教室のチラシ

コロナ下の活動

学習支援

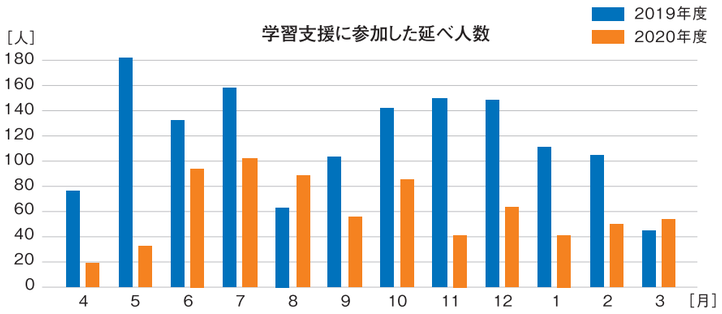
・感染が日本でも少しずつ拡大していく中、2020年2月末までは学習支援を行っていたが、一斉休校と同時に学習支援も一時休止。しかし保護者から再開の要望が寄せられ、3月10日から支援の必要性が高い子どもを中心に呼びかけて活動を再開した。
・暗く厳しい表情で静かに信愛塾に入ってくる子どもが増加。勉強以前に心のケアをする必要があり、おしゃべりをして、少し勉強をし、一緒に外で遊ぶことで少し笑顔になって帰っていくが次に来るときには暗い顔つきをしていて、その繰り返しの日々。
・休校で給食がなくなったことで子ども達は安定して食べられる機会を失い、同時に友達と机を並べて食事をする楽しみとしての機会も失った。キッズレストラン笑福と料理研究家の長島由佳さんの協力を得て昼ご飯を提供。休校期間中は月に4・5回、学校が分散登校の形で再開した6月は、必要性をより感じて毎回のように食事支援を行い、信愛塾で昼ご飯を食べてから登校していく子どももいた。
・3～6月の間は学校ごとに曜日で振り分け、時間もずらして子ども達を受け入れた。学習支援のボランティアも隔週で来てもらい、一度に来る人数を抑えて活動を継続した。現在も曜日を振り分け、ボランティアの人数の調整も継続している。緊急事態宣言が出ている間は、宿題と音読が終わり次第帰宅させている。十分に遊ぶことができない子ども達はストレスを感じながらも、それでも「信愛塾に来れて楽しい」と言う子どもも少なくない。

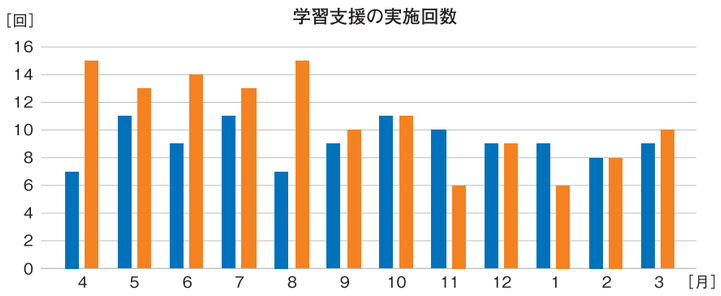
生活相談

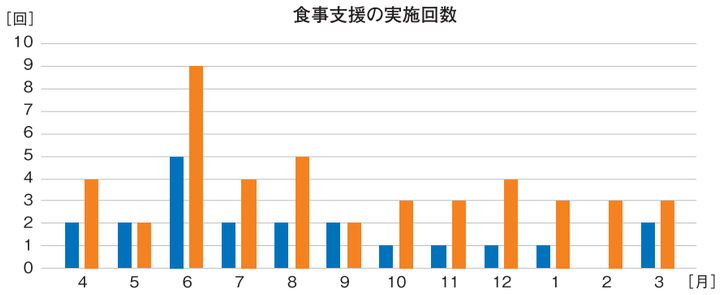
・中国の春節を前にした2020年1月中旬から「中国にいる家族を呼び寄せたい」「短期滞在で来日したが滞在期間を延長したい」などの相談が寄せられ始めた。子どもが通う学校からも「在籍している児童が一時帰国したまま、戻ってこれなくなっている」という相談が入った。
・子どもと保護者の安否確認のための家庭訪問が毎日のように行われる。マスクをして距離をとった短時間の訪問でも、直接子どもの顔を見て、保護者の話を聞き、初めて分かることが多いためである。
・相談の内容はどんどん深刻になっていった。雇い止めや休業による失業、仕事をめぐる同胞同士のケンカや生活の困窮、またそれらがストレスの一因にもなっていき、DV、ネグレクト、若者の自傷行為などの相談が寄せられるようになった。Stay Homeと言うが、子ども達にとって家が必ずしも安心できる場所とは限らないことが分かってきた。
・保護者が持ってくる特別定額給付金の申請書を幾度も一緒に書いたり、生活保護の申請等も行政の担当セクションにつないで手続きを行った。一方で「死にたい」と話す高校生、心療内科にかかる若者、家庭という密室で起こる虐待を受けた子どものケアなど、感染の拡大が弱い者をより弱い立場に追いやる負の連鎖が依然として増加している。
・コロナ禍で困窮する家庭に食料品（米・小麦粉・缶詰・インスタント食品など）と日用品（手指消毒用品、マスク、生理用品、シャンプー、タオル、文房具など）、衣料品を提供している。

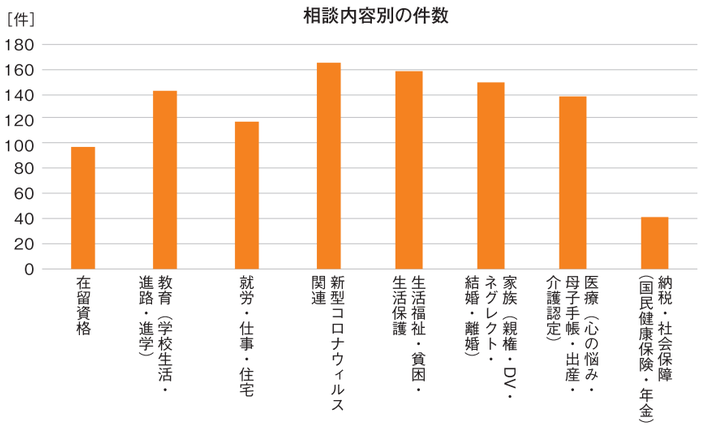
左：普段はうるさいほどににぎやかな学習室で、休校期間中は鉛筆の音が聞こえていた ／ 右：距離もとれるキャッチボールを楽しんでいた

数字で見る一年









学習支援

・通常授業が始まった7月以降は、密を避けるため、曜日で小学校を振り分けて活動を続けてきた。一度に来る子どもの数を抑えた結果、2019年3～5月は399人の子どもが来ていたが2020年の同期間は97人に大きく減少した。

・学習支援の実施回数は、1回目の緊急事態宣言中の4～5月と学校が分散登校で再開した6月も休止することなく継続し、特に夏休み中は感染対策をとりながら積極的に学習支援を行った。

・学習支援の実施回数は昨年より増加しているものの、受け入れられる子どもの人数には限界があり、結果として学習支援に参加した子どもの数は2019年度の4割程度に減少している。

・食事の支援を積極的に行うように心がけた結果、ほとんどの月で2019年度より回数が増えた。

・6月は分散登校で学校が再開したものの給食がなかったため、学習支援の度に食事支援も行った結果、回数が2019年度より大幅に増加した。

生活相談

・2020年はコロナ禍で困難な状況に追いやられ、外国人からの就業や公的支援などに関する相談が多かった。

・新型コロナウィルス関連の相談は、感染や検査、各種の給付金・支援金の申請、出国や入国に関するものなど。

・在留資格が関係してくる複合的な相談も増加の傾向にある。

信愛塾について

あゆみ

信愛塾は1978年秋、横浜市中区にある中華街の一角で誕生した。
それは何よりも、子ども達が自分達の文化に誇りをもちながら自立してほしい、
基礎学力をきちんと身につけてほしいという保護者達の強い願いによるものであった。
以来信愛塾は在日外国人と日本人が出会い交流し、共に支え合い、
共に生きる社会をめざす具体的な活動の場として成長してきた。
その後、2004年には、日本に居住する外国人の教育生活相談や学力・進路保障事業などを行いながら、
在日外国人との共生社会の実現に寄与することを目的としたNPO法人の設立に至った。
現在、相談センター・信愛塾は外国につながる子どもたちを中心とした「居場所」づくり、
日本語・母語を使用した学習支援、子ども会活動、そして在日外国人の人権や教育・生活相談等、
在日外国人と共に生きる社会を築くための様々な活動を展開している。

沿革

1978.10　中区中華街に信愛塾誕生
1983.4　子ども会活動の他に補習教室、韓国朝鮮語講座、地域学習会などの活動を始める
1991.4　高校生学習会、日本語教室、信愛塾文庫の活動がはじまる
1992.7　第1回ヨコハマハギハッキョ（夏期学校）開催
2001.8　南区中村町1丁目（現在の場所）に移転
2001.12　「かながわボランタリー活動推進基金21 奨励賞」受賞
2004.11　NPO法人在日外国人教育生活相談センター・信愛塾設立
2006.11　横浜弁護士会「第11回人権賞」受賞
2007.9　スタッフ育成研修（かながわ民際交流基金助成事業）
2010.11　「神奈川新聞地域社会事業賞」受賞
2014.11　「横浜文化賞」受賞
2016.1　かめのり財団「第9回かめのり賞」受賞
2018.9　毎日新聞社会事業団「第48回毎日社会福祉顕彰」受賞
2018.11　設立40周年記念集会開催／社会貢献支援財団「社会貢献者表彰」受賞
2019.9　ニッポン放送「阿部亮のNGO世界一周!」出演
2020.2　NHKワールド「DIRECT TALK」出演
2020.7　NHK Eテレ「こころの時代～宗教・人生～」出演

2020年度最後の学習支援後に信愛塾の前で

NPO法人在日外国人
教育生活相談センター・信愛塾

232-0033
神奈川県横浜市南区中村町1-1-12-101
Tel/Fax:045-252-7862
Mail:shinaijuku@gmail.com
HP:www.shinaijuku.com